



DCM

## カミネッコンを用いた植樹活動

全国でホームセンターを運営するDCM株式会社では、2007年から植樹活動を展開している。必要な作業を分業で行い、接触を最小限にすることで、コロナ禍においても植樹活動を継続したことが評価され、令和3年度「森と人を育てるコンクール」で、民間企業初となる最優秀賞を受賞した。



「菊水いもい認定こども園」の園児たちと植樹活動を行うDCMの今野さん

未来の森を育てる みんなで力を合わせて



植樹活動で使用されているカミネッコンの再生紙製ポットは、森林土壌への負荷が小さく、苗木が生長する際にはポットが分解されて土の一部となる。

### 創業者の思いを受け継いで 植樹活動に力を入れる

2007年から北海道を中心に植樹活動に取り組んできたDCMでは、従業員とその家族、店舗のユーザー、取引先のボランティアによる植樹活動の規模を拡大している。それが「DCMの森プロジェクト」である。2022年度には、北海道の江別市や函館市をはじめ、岩手県奥州市や愛知県設楽町で植樹会を実施している。DCMの植樹活動のきっかけは、前身の「石黒ホーム」を創業した石黒靖尋氏が、2006年に北海道神宮での植樹活動を偶

然目にしたことだった。北海道大学の東三郎名誉教授が、自身が考案した植樹ポット「カミネッコン」を使った植樹を実施している様子に、自社での植樹活動に使うきっかけになったという。広報・CSR室の今野さんが「みんなで植樹するために適したツールだということが決め手だったようです」と語るように、誰もが気軽に参加できることが、今日まで続く植樹活動の根幹になっている。カミネッコンは、[ポットの組み立て][苗木の移植][苗木の育成][植樹地への搬送][植樹]という各段階で分業可能であることがポイントで、人々の接触機会を減らせたためにコロナ禍でも植樹活動が継続できたのだ。

### 作業を分業化することで 植樹に関わる人数を増やす

現在使用しているカミネッコンの一番のメリットについて「何よりも素晴らしいのは、小さな子どもでも扱いやすいということです。組み立てたポットに絵やメッセージを描いたりするのも楽しいですし、愛着も湧くと思います」と語る今野さん。植樹に参加した「菊水い



植樹を楽しむ園児たち

ちい認定こども園」の園児たちも、思い思いの絵や文字が描かれたポットを大事そうに抱えていた。こども園の先生からは、園児が木に触れる機会を設けてくれることに感謝されるそうだが、「お礼を言わなければいけないのは私たちです。子どもからはいつも元気をもらっていますから」という今野さんが目を細めて見つめる先には、持ち寄ったカミネッコンに土をかぶせ、一生懸命に植樹をしている園児たちの姿があった。それぞれの得意分野を活かすことでより多くの企業や社員が参加できる植樹活動にできるのではないだろうか。「植樹地の地ごしらえは造園業者さんに依頼できますし、苗木の購入については園芸業者さんに相談の上で進めて、植樹地への搬送の仕事は運送業者さんをお願いするなど、いろいろな企業さんに関わっていただければ、この活動がもっと盛んになると考えています」。

### みんなで再生した森を 子どもたちの未来につなげる

今回の植樹の舞台となったのは、江別市の道立自然公園野幌森林公園である。2018年の台風21号による大規模な倒木被害でぼっかりと空き地になったスペースに、自然の森を再生させようという活動だ。北海道からの声かけに応えるかたちで、2020年からDCMがここで植樹を展開している。このように、植樹活動の場所はDCMが店舗を出店しているエリアが基本になっている。「木を植えて森林空間を再生させることで、ゼロカーボンに協力していきたいと考えています。木材やパルプ材を原料とする商品を扱う企業として、木材の循環利用や従業員の環境に対する意識を醸成することは非常に大切です。みんなで力を合わせて森をつくる」というこの植樹活動は、店舗を中心とした人の輪を広げることにもつながっている。来年度以降はカミネッコン以外の植樹方法にも取り組んでいく方針とのことだが、未来に向かって無理なく続く活動を可能にするのはお互いの支え合いの心だ。「企業のCSR活動の一環ではありますが、自分のやってきたことが森というかたちで次の時代に残っていくというのも、実は大きなやりがいになっています」と語る今野さん。この日、園児たちが植えた小さな苗木が大きくなる頃にはきっと素晴らしい未来になっている、そう願わずにはられない。



DCM株式会社 広報・CSR室主任(東日本担当)

今野 久さん



2006年に植樹ポット「カミネッコン」を使ったバイオブロック工法による植樹を北海道神宮で実施している様子を偶然目にして、自社の植樹活動に活用できると考えた。



基本的に店舗を展開している地域でカミネッコンによる植樹活動を展開。分業化で人々の接触機会を減らすことができるため、コロナ禍でも活動を継続していた。



植樹活動の規模を拡大した「DCMの森プロジェクト」として、より幅広い地域で協力を仰ぎながら息の長い植樹活動を展開し、SDGsやゼロカーボンに協力していきたい。



## ニチレイフーズ ニチレイ育みの森

森町の町有林を借り受け、森林保全活動を行っている「ニチレイ育みの森」では、参加型の植樹が行われている。工場の従業員と地域の人々とのつながりを育み、次世代の子どもたちに美しい桜と豊かな自然を伝える活動である。



小さな苗木が、やがて美しい桜の名所になることを想像しながら植える参加者たち。そのイメージの共有もこの活動の楽しさの一つだという。



売り上げの一部が森林保全活動の資金になる社会貢献活動から、従業員の声で参加型の植樹活動「ニチレイ育みの森」をスタート。



コロナ禍以前は工場の従業員やその家族、町民による植樹イベントを実施し、現在も参加人数を絞ってソメイヨシノを中心に植樹。



次世代に美しい桜と豊かな自然を残すことに加え、ウッドデッキの整備等によって地元の人々の憩いの場としても活用していきたい。



次代に美しい桜をつなげる  
楽しい植樹活動を展開

参加者が着用しているTシャツは、ニチレイの社内活性化プロジェクト「ハミダス活動」のシンボル。国内外の様々な活動で社内の一体感や連帯感を醸成している。

全社的な社会貢献活動を  
従業員の声でローカライズ

日本の冷凍食品の歴史は、1920年に森町に建設された冷凍魚生産工場から始まった。その跡地にあるのがニチレイフーズ森工場である。2017年から工場の敷地に桜の植樹を行う活動がスタートし、「ニチレイ育みの森（以下「育みの森」）」として工場の従業員やその家族、町民による植樹イベントが実施されてきた。この取組の元になった「森にGood!」は、同社の人気シリーズ「お弁当にGood!」の対象商品の売り上げの一部が森林保全活動の資金になる社会貢献活動で、現在では「地球にGood!」と名称変更している。それが「育みの森」での活動になった理由を、ハミダス推進部の石井さんは「従業員から自分たちも社会貢献がしたいという声が上がって、参加型の植樹を始めました」と語る。この「育みの森」は、ニチレイの社内活性化プロジェクト「ハミダス活動」の延長線上にあるもので、見ているだけで元気になりそうな赤いTシャツがユニフォームだ。「育みの森」は、地域とのつながりや従業員のモチベーションアップにもつながっています。何より楽しいのが一番です。

次世代の子どもたちに  
美しい桜と豊かな自然を渡す

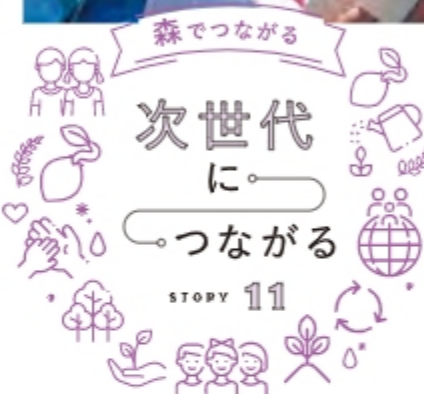
桜の名所として知られる森町らしく、樹種にはソメイヨシノとヤエザクラが選ばれた。その成長とともに、次世代の子どもたちに美しい桜と豊かな自然を渡すこともこの活動の大きな目的だ。コミュニケーションの場として現在はウッドデッキの整備にも着手しており、「コロナ禍が落ち着いたら、ウッドデッキでお花見をしようみんな話しています」と語る石井さん。その日が訪れるのも、そう遠くはないことだろう。



株式会社ニチレイフーズ  
ハミダス推進部 地球にGood! 担当  
石井 泉さん

子どもたちの未来に

森を贈るための活動を継続



## 北海道 コンサドーレ札幌 コンサ百年の 森づくり

北海道コンサドーレ札幌では、未来に豊かな緑を残すための「コンサ百年の森づくり」を2008年6月にスタート。支笏湖周辺での植樹活動に続き、2009年度からは小学生を対象とした「森の教室」を開催している。



リーグのクラブに求められる社会貢献活動として、マスコットのシマフクロウとも関連する支笏湖周辺国有林の植樹に応募した。



サポーターなどと協力して植樹活動を展開した後、小学生を対象に森の大切さや役割について解説する「森の教室」をスタート。



「背伸びせず、できる範囲で楽しく」をモットーに、百年後を見据えた森づくりを展開し、生物多様性の保全にも寄与していきたい。

森林を再生させることは  
コンサならではの地域貢献

北海道コンサドーレ札幌のマスコット・ドーレくんのモチーフとなったシマフクロウは、環境庁のレッドリストでは絶滅危惧IA類（CR）に分類されている。「植樹活動を始めたきっかけは、シマフクロウが住めるのはどんな森だろうという疑問からでした」と語るのは、株式会社コンサドーレ経営管理部の三谷さん。「リーグクラブに求められる社会貢献活動として、未来に豊かな緑を残す「コンサ百年の森づくり」を2008年にスタートさせた。

森の大切さや役割を  
未来を担う子どもに伝える

「コンサ百年の森づくり」の舞台になっているのは、2004年9月の台風18号によって甚大な風倒被害を受けた支笏湖周辺国有林のうち、11.63haのエリアである。サポーターやスポンサー企業の協力も得て、2008年から2010年にかけて約8,000本の植樹を達成した後、小学生を対象とした「森の教室」に



株式会社コンサドーレ  
経営管理部  
三谷 淳さん

シフトしている。子どもたちに森についてもっと知ってもらおうと、2009年度からスタートした活動だ。組み立て式ポット「カミネッコ」作りと補植作業、森林の専門家による森の生態などの授業を行い、森や自然環境についての理解を深める活動を展開している。「ゼロカーボンや生物多様性の保全にもつながることを伝えています」。そんな三谷さんは、活動を継続するコツを「背伸びせず、できる範囲で楽しくやること」と語る。「森の教室」にドーレくんが参加していることも楽しさの演出の一つだ。「リーグ百年構想」にちなんで名づけられた「コンサ百年の森づくり」。百年後には、シマフクロウが生息できる森が増えていることを願いたい。